

## 「本国は天にあり」（フィリピ三章一七〜二一節）

### 1 聖徒の日

一月第一日曜日は教会では昔から「聖徒の日」として亡くなった方々を覚える日となっております。私どもも長くこれを大切に、毎年この日こうした形で永眠者記念礼拝を捧げています。

逝去された方々を記念する時を持つという点では、カトリックもプロテスタントも変わりませんが、日にちや持ち方が少し違って、私の記憶に間違いがなければ、カトリックでは一月一日に聖人のための礼拝（ミサ）が、二日に一般の死者のための礼拝がおこなわれているようです。私どもはもちろんプロテスタントで聖人の規定などありませんので、一月第一週の日曜日に、亡くなったすべての人を覚えて礼拝をおこなっています。

教会を「聖徒の交わり」と呼んでいるくだりが「使徒信条」（信仰内容を箇条書きにしたもの）にあります。この「聖徒の交わり」、もう少し簡単にいえばキリスト信徒の交わり、共同体ということですが、この交わりを構成しているのは生きている者たちだけではありません。死んだ人も入っています。亡くなった方はいわば天上会員です（私どもは地上会員ということになる）。死者も生者も教会の会員であり、会員でありつづけます。私どもの北三番丁教会という個別の教会の会員でありつつ、普遍的な一つなる教会の一員なのです。

聖徒の日はそういった交わり、絆を確認し深める日でもありません。また私どもにとって信仰の先輩方は、私どもを雲のように取り囲む証人の群れです（ヘブライ二・一）。これらの人々の前で恥ずかしい歩みはできない。証人の群れに励まされて地上を歩む私どもが自らの人生の馳場をしつかり歩んでいくようにその思いを新たにする時でもあります。じっさいそうした人びとなしに私どもは存在しないのです。その関わり、関係は、つねに感謝をもって思い起こされるべきことです。こうしたことが逝去者を記念するというこの意味です。

記念ということに関して、もう少し付け加えておきたいと思えます。記念というのは、いまいったように感謝をもって思い起こすということですが、聖書ではもう少し多様で深い意味をもっています。

神の民イスラエルがその歩みの中でその時々にくり返し思い起こしてきたのは出エジプトの故事です。モーセに率いられたイスラエルの民数十万人がエジプトでの奴隷の生活から脱出し、四〇年という長い旅路をへて、神の約束の地へと入っていくという、ご存知の方も多い出来事です。これは旧約の民の救いの原体験として長く語り継がれてきたのです。新約聖書にまで及びます。思い起こすたびに新たな力が呼び起こされます。礼拝においてこの出来事が思い起こされるとき出エジプトの救いと解放の神がそこに臨在されるのです。それによってイスラエルの人々は苦境も乗り越え、進んで行ったのです。彼らは思い起こし、それをこころに刻んで歩んでいきました。記

念するということは、昔のこととして、終わったこととして、そういうこともあった  
そういう人もいたとしてただ振り返るということではありません。記念し、思い起こ  
すことは、先人と共にあった神が私どものところにも来られる、臨在されるというこ  
とです。その同じ神が私どもの神だという経験です。礼拝は思い起こすことです。キ  
リストによる神の救いを、神のその働きを、私どもみんなに与えられた恵みを思い起  
こすことです。

キリスト教が昔日本に入ってきたときキリスト教は先祖を敬わない宗教だという批  
判をずいぶん受けたことがあったようです。いまはそうした批判というか、誤解はも  
うないと思います。なるほど死者をあがめる、これを神として祭るといふようなこと  
を私どもはしません。キリストにあつて亡くなった方のだれ一人としてそんなことは  
望んでもいない。永眠者記念礼拝は永眠者を礼拝することではない。亡くなった方々  
にとつて生きている時も死ぬ時も「ただ一つの慰め」（ハイデルベルク信仰問答）で  
あつた主イエス・キリストの神、この神を思い起こし、賛美し、悔い改め、感謝し祈  
る、それが今日の礼拝です。

## 2 国籍は天にあり

今日の聖徒の日、私どもに示された聖書の言葉は、使徒パウロの書いた、フィリピ  
の信徒への手紙の一部です。パウロという人は、キリスト教のまったくの始まりのと  
きに活躍した、一般に使徒と呼ばれた指導者です。

この箇所が使徒が描き出しているキリスト信仰に生きる人とはどのような人では  
うか。今日私どもが覚えている信仰の先達も歩んだキリスト者の人生とはどうい  
うものだったのでしょうか。

兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。また、あなたがたと同じよう  
に、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい（一七節）。

じつに大胆な勧めです。自分に倣いなさい、などと言うことは私どもにはなかなか  
できません。

しかしなぜそのように大胆に言うことができるのか。それはパウロ自身がキリスト  
に倣って生きているからです。自分に倣えというのは、キリストに倣って歩んでいる  
自分にならえということ（第一コリント一・一）。つまりフィリピの兄弟たち  
よ、キリストに倣いなさい。したがってキリストに倣って歩んでいる私にも、他の人  
にも目を留めなさいということ（一七節）。

キリストに倣う、これが、キリストに救われた者の生き方です。それがどのような  
形をとっていたとしても、一人ひとりどのように違っていたとしても、私どもが今日  
記念している人もまた、そのような志において人生を歩み通されたということは間違  
いないのです。

キリストに倣うということは、簡単に言えば、キリストの愛に倣うといつてよいと

思います。言葉では簡単ですが、その愛は人のために十字架の死を自らに引き受けるほどのものです。生半可なものではなかった。しかし愛です。自己中心ではない。他人（ひと）中心です。罪深くとも不信心でも神はその人を愛しておられる、彼を離れない、共にいます。そうしたすべての人への神の愛を自ら生きようとされたのがイエス・キリストでした。それを言葉と行いをもって証した方がイエス・キリストでした。このキリストの愛を指し示す、このキリストの生き方に応ずる、それを自分においてくり返す、それがキリスト者の歩みです。今日の箇所を描き出されているキリスト信仰に生きる人とは、第一にそのようにイエス・キリストに倣って愛に生きようとした人です。

もう一つのことを、キリスト者の生き方に関して、この箇所は私どもに語っているように思います。

わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています（二〇節）。

もう一つのこととは、キリスト信仰に生きる人とは終わりを知って生きる人、希望をもって生きた人だということです。「この世のことしか考えていない」（一九節）人ではないということです。

最初の教会の人々はイエス・キリストが天に上げられるのをじっさいに見送った弟子たちの話を聞いていたので、キリストはすぐにでも再来される、古い世界は終わりの世は一新されることを強く意識していました。「キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています」とある通りです。

この終わり、キリストが再び来られて、悪が打ち破られ、死に死がもたらされ、キリストの支配が確立されます（第一コリント一五・二四以下）。なるほどその時には、すべての人が、キリスト者もむろんのこと、神の裁きの前に立たせられる。しかしキリストの執り成しによって私どもは救われる、これがキリストに生きる人々の希望でした。キリスト者はこの希望に生きる人です。

希望とはここにもないものによって生きることです。この世にしか望みを持たない人ではないということです。私どもの真の国は天にある。キリスト者はこの地上にあってはいわば旅人です。旅人がそうであるように、間に合うだけの身軽さで歩む。それがキリスト者です。愛と希望、そしてそれを可能ならしめる信仰、それがキリスト信仰に生きた人の人生でした。

### 3 永遠の交わり

初代の教会の人たちは、いま申し上げたようなキリストの救いの日の到来への希望において今日の私どももよりずっと強い思いを持っていたように思います。しかしそれを待ち望むという点では、違いはないのです。キリストにあって召された人たちも私ども救いを待ち望んでいるのです。

キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです（二一節）。

キリストが来られる時を待ち望む、そのキリスト日とは、私どもの甦りの時でもあります。キリストは死者の中から甦った。それはすべての者の「初穂」（第一コリント一五・二〇）のです。その時私どもも甦らされる、復活するのです。

以前、千の風になってという歌がはやったことがあります。今でも歌われ、時々耳にします。歌の善し悪し好き嫌いとは別に、やはり死んでなんかいないという歌詞はひっかかります。そんな目くじらを立てるほどのことではないけれど、でも人は死ぬのです。「人間にはただ一度死ぬことと、その後には裁きを受けることが定まっています」（ヘブライ九・二七）。死んで復活するのです。死んで甦らされるのです。神の裁きの前に立つのです。死んでも死なないで近くに、いろいろの姿をとって寄り添っているのではないのです。

聖書は人の死をたんなる生き物の死とは見ていない。生き物なら死も自然です。聖書は人の死を神の裁きと見ています。罪のゆえに、その結果として、アダムの子孫として、人は裁きとしての死を死ぬと考えています。死は人が神によって否定されることです。神との関係を断ち切られることです（マルコ一五・三四）。人が人である以上それ以外の死を死ぬことはできません。

しかしこの神との関係そのものは、今日記念として覚えている方々も生前神によって与えられたこの関係そのものは断たれない。キリストのゆえに断たれない。それが福音です。神が永遠である以上、神との関係もどうして永遠でないはずがあるでしょうか。人が死の力によつて神から切り離されても、神は決して人を捨てることがない。神が永遠であり、その愛も永遠だからです。

その永遠の関わりを証しするのが人の甦りです。人の将来、それは死んで無くなってしまふというではありません。霊魂だけが何らかの仕方では生き延びるということでもありません（でもその場合の霊魂とはなんでしょうか）。輪廻転生して生まれ変わるのではありません。この体をもって甦るのです。しかし甦った体は今の私どもの体ではない。もしそうであるならまた死ななければならぬ。そうではない。私どもの卑しい体が神「御自身の栄光ある体」と同じ形に変えられるのです。一粒の麦は種としては死んで大いなる実りをもたらします。神がそれぞれに豊かに体を与えてくださいます（第一コリント一五・三五以下）。

こうした望みを、逝去した方々と共にしながら、私どもも私どもに貸与された限られた生を信仰をもって歩んでまいりましょう。

（二〇一八年一月四日）